京田辺と同志社と私
―同志社京田辺祭はいかにして生まれたか―

講演	杉岡　秀紀〔すぎおか・ひでのり〕
講師紹介	福知山公立大学地域経営学部准教授

自己紹介―京田辺と私―

このキャンパスに来るのは20年ぶりでしょうか。懐かしい思いで福知山から２時間半くらいかけて参りました。まずは母校で皆さんの前で話すという機会をいただきましたキリスト教文化センターに対して感謝したいと思います。この同志社スピリット・ウィークは私の学生時代からありましたが、今日は京田辺校地での最初のプログラムということで、皆さんも関心があるであろうクローバー祭がどういうふうにしてできたのかについて、12年前の記憶をたどりながら原点はこうだったという話を中心にお話ししてみたいと思います。

私は経済学部出身です。当時は６学部しかありませんでした。今は倍以上ありますから隔世の感があります。学部時代は去年、定年退職されました郡嶌孝先生のもとで環境経済学を勉強していました。２００３年から大学院に進学して公共政策を専門に博士前期課程・後期課程と進む中で社会との接点が多くなってまいりました。２００７年からは東京で国家公務員のお仕事に従事し、３つの政権にかかわりました。最初は第一次安倍内閣、その後、福田内閣、麻生内閣における行政改革の仕事です。具体的には社会保険庁改革、年金を運用する組織のあり方を考えるという仕事をしていました。公務員というと早く帰れるのではないかと思っておられるかもしれませんが、国会が始まり、質問があたると帰宅時間は夜中の４時とか５時、朝帰りになります。京田辺がお膝元の京都６区の山井和則さんから質問をされました。夜中の12時頃に質問が届き、答弁資料案を作文して朝方、大臣、副大臣、政務官の３役にレクチャーのための資料を届ける、こういうことがずっと続くわけです。

さて、今日は「建学の精神とキリスト教」という講義の一環でもあると聞いていますが、初代文部大臣として新島襄の名前も出たほど、新島襄は日本を代表する教育人でした。新島襄が唱えた「地方で教育を」という精神や考え方は、私も引き継ぎたいと思っています。ただ、私が霞が関で仕事をしていた時、霞が関には同志社のＯＢはほとんどいませんでした。同志社のＯＢの皆さんと一緒に議論する機会は本当に少なかった。関西では同志社を知らない人はいませんよね。百四十数年の歴史がありますから「ああ、同志社ですか」という会話が成立します。しかし、関東に行くと「同志社はどこの県だっけ」と聞かれたこともありました。ショックでしたね。特に霞が関の人は東大出身の人が多いので、「何年卒ですか」という会話が飛び交います。東京大学法学部を出たというのがデフォルトになっているんですよね。最初は違和感を覚えました。その意味で、逆に目立つチャンスでもありましたので、存在感を示すために日々がんばっていたことを思い出します。

２００９年からは同志社大学の政策学部で非常勤講師をしていました。２０１２年からは京都府立大学で５年間教鞭を取り、２０１６年秋から地方創生のど真ん中の京都府北部の福知山で教鞭を取っております。専門は公共政策、地方自治になります。これまでに出版した本のタイトルを読んでいただくと私の関心が分かると思いますが、地方再生、地方貢献、公共人材、地域自治、地域実現、地域創生、地域政策、地域の未来像などを日々研究しながら、実践もしています。ほぼ研究室にはいません。仕事をするのは車や電車、新幹線、飛行機の中で、ほぼ毎日、どこかの地域をうろちょろしています。

ところで、私が同志社で単なる受け身の学生ではなく、仕掛ける側に回ったのが２００１年でした。最初にかかわったのが「フレッシュマンキャンプ」。当時は学生支援センターではなく、学生課と言いましたが、その職員の皆さんといろいろ議論して一緒にプログラムを作りました。もう16年前になりますね。翌年２００２年は「スポーツフェスティバル」の創設にかかわりました。当時、日韓合同のＦＩＦＡワールドカップがあり、同志社ＯＢの宮本恒靖選手が大活躍をしていました。試合後すぐ講演会が企画されたのですが、古川先生が招聘され、３０００人くらい集まったのではないでしょうか。知真館２号館１階の大教室が入りきれなくて、急きょ２階の大教室にも同時中継をした記憶があります。こうした同志社スポーツの盛り上がりもあり、２００４年には、学生課から飛び出してスポーツ支援課という部署ができました。このイベントは残ってますかね。それと２００３年から同志社生協理事を８年間、学生・院生・教員それぞれの立場で務めました。あとは２００４年には、学生課からカレッジソングを伝える仕掛けをつくりたいという話がもち上がり、当時組んでいたバンドで歌をつくり、入学式で配布するＣＤの一曲を作らせてもらいました。同志社エンタープライズから販売されていると思います。これも12年前の話ですが、京田辺での良い思い出です。またその後も立場を替え、政策学部の非常勤講師として学生を教えたり、２００９年には今出川のクラーク・チャペルで結婚式を挙げたりもしました。

それでは本題に入ります。今から11年前の２００６年、今のクローバー祭の前身「同志社京田辺祭」をつくりました。と言うのも当時、京田辺に大学祭がなかったのです。一万数千人がキャンパスで学んでいるにもかかわらず、工学部（現在の理工学部）は４年間、ここで完結するにもかかわらず、です。こうした状態に対して「おかしい」と問題提起を大学にしたら「あんたがやったらいい」となり、大学からも予算が出て「同志社京田辺祭」の創設に至るわけです。ただ、実は２００５年に、幻の１回目の同志社京田辺祭が実施されています。あとで詳しく話します。

ここで資料として配布した『One Purpose』について一言お話しします。「同志社京田辺祭」。これができた最初のきっかけは私自身の学生時代の活動になります。２００２年４月号の『One Purpose』に掲載いただきました。京田辺市民とともに活動していた地域通貨についての取材でした。ちなみにこの号では学生時代につくったバンド「Chicago poodle」も特集で紹介いただいています。私は引退しましたが、他のメンバーはまだ現役で活動しています。これを機会に関心をもっていただければ幸いです。

次に２００６年の12月号です。この号は同志社京田辺祭の特集号で実行委員長として取材いただきました。この時に京田辺校地開校20周年記念として京田辺祭が誕生したということですね。「広がる地域と大学のつながり」という見出しで、現在総長・理事長の八田先生が学長として表紙に登場しています。

そして、２０１６年12月号に10年ぶりに取材いただき、「あれから10年、どういう思いで支援しているか」ということを述べさせてもらいました。

月日が経つのは早いですよね。学生時代は本当にアッと言う間です。同志社のマークの三つの正三角形は「知・徳・体」をあらわすと言われますが、私は「いい先生、いい本、いい友と出会え」と教えていただきました。１回生の皆さんはこれから４年、上級生の皆さんは残りのキャンパスライフをぜひ有意義に過ごしてほしいと思います。

この号の特集「京田辺校地開校30周年記念企画京田辺キャンパスの『今』」の表紙に注目してください。１９８６年の京田辺キャンパスはこんな感じでした。ローム記念館はないですね。夢告館が建っているあたりも空き地でした。今は緑も多いし、キャンパスの建物の数も増えました。チャペルもできたと聞いています。それも含めて大きく変わったなと。今から10年、また変わるだろうと思います。

京田辺と同志社

今日、皆さんに知っていただきたい京田辺と同志社の関係について話を移します。私は修士論文で「大学と地域との連携・協働によるまちづくり」をテーマに取り上げ、京田辺市を事例に論文を書きました。ここではその調査研究の中で明らかになったことをお伝えしたいと思います。

皆さんは京田辺キャンパスが１９８６年に開校し、京田辺と同志社大学の関係はたった30年と思っているかもしれません。それは誤解です。実は、そうではないのです。同志社と京田辺の歴史はものすごく長いのです。まず一つは京田辺キャンパスができて30年ではないという話をします。この京田辺キャンパスを学校法人同志社が購入したのは１９６６年です。私もまだ生まれていませんが、高度経済成長の最中に早くも同志社はこの土地を買っていたんですね。つまり、たった30年間ではなく、今、60歳の方がおられればその方が10歳の頃に学校法人同志社はキャンパスの土地を買っていたわけで、半世紀にわたる関係性があって今、ここに我々が学んでいることを強調しておきたいと思います。

次に、なぜ、その土地を同志社が買ったのでしょうか。この背景には、１９６４年の国の政策があります。すなわち都市部に工場や大学があまり集中しすぎると人口が増えて交通が麻痺するため、大学や工場などを郊外へ出そうという趣旨の「工場等制限法」ができます。今この法律は廃止されたので同志社の文系学部は京田辺校地から今出川校地に戻ってしまいましたが、当時、８万平米しかない今出川キャンパスには１万３０００人の学生がいて、それはもう手狭だったわけです。当然、生協食堂もいつでも満杯で、キャンパスの至るところが混雑していた。それを解消しようというのが京田辺への キャンパス移転だったわけです。ちょうどこの時期、立命館大学は草津へ、龍谷大学も瀬田へ、中央大学は多摩へということで、都市部から地方に土地を買い、広い山の上に大学をつくるという流れができるわけです。当時の経済学部のある先生は「数年前、新入学生が多くて開講間際になって教室に入れない時代だった」と回顧されています。８００～１０００人の学生が入れる広い教室は今出川校地にはなく、新たなキャンパスが求められた、つまり利害が一致したということです。なお、工場等制限法ができた翌年の学校法人同志社理事会の記録が残っています。教室不足の対策として京田辺の土地を買収する。なぜ京田辺だったか。広大な土地があることは言うまでもなく、今出川校地からのアクセス、土地の値段、あとは住民の反対運動は起きないかなどを総合的に勘案して田辺町がいいのではないかと判断されたのだろうと思います。１９６５年当時、上野先生が学長でした。理事長に田辺校地候補地使用に関する希望書が提案され、理事会で正式決定をして半年後には土地を買っています。ものすごく早い。国から「市から大学は出ていけ」と言われて２年後には土地を買っている。田辺町と同志社大学が公式に契約を交わし、京田辺キャンパスに決まった瞬間です。

その後１９８２年に、大学評議会で田辺校地整備実施計画方針を立て１９８４年に着工しています。ここに注目していただきたい。繰り返しになりますが、同志社は１９６６年に土地を買っている。しかし、実際に京田辺キャンパスがオープンしたのは１９８６年です。20年間も空白がある。この空白期間に何があったのでしょう。ヒントを申すならば、今の学生気質と当時の時代の差があります。もう一度言います。土地は買いました。甲子園20個分買ったのです。ただしキャンパス移転はすぐに進まなかった。本来なら１９６６年に土地を買い求めたならば１９６８年頃にはオープンしてもいいくらいです。しかしそうはならなかった。何があったのでしょう。結論を急げば当時、学生からの反対運動が相次いだのです。私が今出川校地で学んでいた時、確かにその名残をとどめていました。今の寒梅館は当時、学生会館でした。その壁面にいっぱいチラシや落書きが残っており、当時、１回生の私は衝撃を受けました。今はきれいでおしゃれな建物ですが、「田辺校地移転反対」、こんな落書きと言いますか学生のメッセージがたくさん並んでいました。田辺移転は大学が勝手に決めたことで、そこには学生自治が不在だと。よく考えればこの時期は60年安保、70年安保の時代ですね。学生紛争があり、東京大学の樺美智子さんが亡くなったことも含めて60年～70年はそんな時代でした。大学は学生紛争に巻き込まれて授業を開講できない。入学式、卒業式も開けない。そんな時代だったと私も諸先輩方から聞いています。そんな時に工場等制限法が理由とはいえ、急なキャンパス移転の話がでてきたものですから当然、学生は怒るわけです。「大人だけで勝手に決めるな」と。今は考えられないでしょう。私の頃はあった自治会も学友会ももう解散してないですよね。当時は学長が入学式で

「皆さん、入学おめでとう」と言ったら、その後に学友会トップが「学生諸君、今の大学はおかしい。学長の言葉を信じるな」と応戦する。信じられないでしょう。これが本当の「学生自治」かどうか、個人的にはちょっと勘違いしていた部分もあると思いますが、ポイントは大学と学生はとにかく対等な関係だったのです。その後、学友会も自治会も解散し、学生部は学生支援センターに代わり、学生自治という言葉は消えました。

１９８０年に同志社国際高等学校がオープンしています（中学校は１９８８年開校）。高校はスムーズにオープンできたが、大学は先ほどのような経緯で遅れること６年。学生運動がようやく下火になって、いよいよこれでいけるかなということで１９８６年にやっと京田辺キャンパスがオープンし、今があります。今、京田辺市との関係性は良好かもしれませんが、当時はゴミの問題や騒音の問題を含めて対立もあり、苦情も多かったと聞いています。こうした過去の経緯も同志社生として事実を知っておいてほしいと思います。過去があって今の同志社があるのですから。

京田辺と新島襄

さらに調べてみて驚いた事実があります。工場等制限法で１９６６年に学校法人同志社が京田辺に土地を買うはるか昔に、実は新島襄がここに来ている歴史があるのです。当時は田辺町という名称ではなかったかもしれませんが、二条城で大政奉還があった15年後、１８８２（明治15）年に京田辺では「南山義塾」という私塾ができています。大学と国際中高の間の坂を同志社山手の方に降りていくと「南山義塾」の碑が建っています。その開校式に新島が来て「学校ヲシテ一地位に安着セス、日々月々進歩改良セシムルノ策ナカルベ〔カ〕ラス」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』１　同朋舎出版　１９８３年　４２３頁。以下①４２３）という祝辞を贈りにこの土地に足を踏み入れているのです。今出川校地も新島八重の兄の山本覚馬から薩摩藩の土地を譲ってもらった歴史があります。隣の相国寺は仏教で、前の御所は神道という面白い土地です。しかし、新島襄に関係があるまちは今出川だけではないのです。同志社英学校ができたのが１８７５年、その後に、新島襄は京田辺にも足を踏み入れている。つまり、京田辺と同志社のご縁はここから始まったと申しあげたいのです。たった40、50年ではないんです。１４０年近くの関係性があると言うべきではないでしょうか。つまり、私はこのご縁があって今の京田辺キャンパスができたと考えています。皆さんに知ってほしいのはまさにここなんですね。大げさに聞こえるかもしれませんが、京田辺市と皆さんと連携して地域に開かれた大学祭をつくるというのも、ある意味新島襄の思いもあるのではと思っています。

また、新島襄がこんな言葉を残している文献も見つけました。１８８３年、群馬の安中で講演した時、「真正ノ教育ヲ地方ニ布ク」（①４０８頁）。そう、地方でこそ教育をやっていくと言い残しているのですね。京都という町はキリスト教に対してもアンチだったわけですが、新島襄が京都に拘った理由は東京に迎合するのではなく、えらい人に迎合するのではなく、まさしく自分たちの良心教育のもとになった、地域教育をしっかりしていくというメッセージだったのではないかと思います。沖田行司先生は、「地域社会との交流は建学の精神にかかわるものだ」とメッセージを残しておられます。現在、私自身も地域と大学をつなぐ活動を京都の北部で展開していますが、そのルーツはここにあるということも申しあげておきたいと思います。地域と大学との関係性をどのようにつなげるか、それは建学者、創設者の思いにつながるということです。これは、そのような思いを感じてクローバー祭をされていますか、という皆さんへの問題提起でもあります。また、こういうことを知っていただいてコンテンツを考えていくと、また違った企画や切り口が見えてくるのではないかということでもあります。

きゅうたなべ倶楽部の誕生

私が同志社京田辺祭の実行委員長を引き受けた背景には学部時代の学びとその後のＮＰＯ活動が大きくかかわっています。結論から言えば、「きゅうたなべ倶楽部」というまちづくりＮＰＯを２００３年につくりました。この団体をつくっていなかったら今の私はないと思いますし、すべての原点はこの活動にあると言っても過言ではありません。東京で公務員もしていなかったと思います。少し詳しくお話しします。

私が同志社大学に入学したのは１９９９年です。１、２年生時はこの京田辺キャンパスで学びました。京田辺に深くかかわるきっかけとなったのは２年生の時です。皆さん、インターンシップという言葉を知っておられますね。当時インターンシップはまだ走りの段階だったのですが、私がたまたま配属されたのが京田辺市役所だったのです。ところが、そのインターンシップの仕事の一環で地域にアンケートを取りに行った時のこと。アンケートに答えていただいたある市民の方から「あんたらな、いい加減にしいや。いつも夜遅くまで騒いでゴミは指定日に出さへんし。道路を２、３人で塞ぐように歩いているし」といきなり市民の方から怒られたのです。最初は全然意味が分かりませんでした。ただ、よくよく考えてみると、これは至極当たり前の意見なのです。と言うのも、京田辺にキャンパスができ、多くの学生が学んでいるにもかかわらず、市民とつながりが薄いわけです。そうなると、大学の良い部分はほとんど伝わらず、市民には悪い点ばかりが目立っていたのです。

このあたりから大学と地域との連携の実態に関心をもつようになり、実際調べてみました。分かったのは、大学教員が京田辺市の委員会に84年から参加していること、公開講座を春と秋に２回実施していること、年１回クリスマス燭火讃美礼拝と市長と学長の懇談をしていること、この４種類でした。もちろん学生は地域でアルバイトをしていますし、多くの学生が下宿もしています。しかし、連携という文脈ではこの四つしかメニューがなかったのです。それも単発で一方通行なものが多いという特徴が見てとれます。これでは、文句を言われても仕方ありません。もちろんこれは大学全体で考えるべきことなので、目をつぶり、耳を塞いでも良かったわけですが、たまたま市民からのお叱りに近い意見を直接聞いてしまった人間の性として、これはいつか変えないといけない、私たちがやらないといけないと勝手な使命感をもってしまいました。それが後ほどの活動の原点につながるわけです。

その後、３年生になってゼミが始まります。私が所属していたゼミの指導教授、郡嶌先生がたまたまお住まいだったのが、これまた京田辺でした。このあたりで京田辺にご縁があるを通り越して、京田辺からは逃げられないと思うに至るわけですが、そんな郡嶌先生からいただいた最初のミッションが「地域通貨を研究してみたらどうか。加えて京田辺市で実験してみてはどうか」というものでした。２００１年のことです。そして、再び京田辺市内で今度は地域通貨に関するアンケート調査を始めます。そうするとまた市民の方からお叱りを受けました。「どうせ君たちは就活で活動を辞めるんやろ。卒業したら終わりなんやろ」と。さすがの私もこの言葉にはカチンときました。しかし、この「なにくそ」という思いがその後の人生を変えます。私はこのある種挑戦状に応えるためにも思い切って就活を辞め、大学院に進学することにしました。そして、大学院１年生の時に作ったのが「きゅうたなべ倶楽部」なのです。つまり、本気で地域と大学の架け橋になろうというチャレンジのスタートです。

「きゅうたなべ倶楽部」では大きく六つの事業を展開していました。一番力を入れたのが月１回、市民の皆さんと大学の関係者が集って名刺交換して勉強し、交流する情報交換会。１３０回、１４０回と今でも続いています。次にマップづくり。学生目線から見て、この店はおいしいとか、このルートは面白い等の情報を盛り込み、クーポンもつけたものを作り配布しました。三つめにキャンパスユース。これは先輩から後輩に家電家具を安く継承する事業です。四つ目にコミュニティビジネス。これは夏休みや土日を利用して市民の皆さんに学生がパソコンを教える講座です。４、５年実施しました。もちろん持続可能性を担保するためにボランティアではなく、有償事業として設計しました。五つ目は後の商店街活性化。三山木駅付近の閑散としていた商店街の活性化をしようと「かぐや姫と竹フェスタ」というイベントを何度も開きました。そこにヒントを得て大学に提案したのが後の「同志社京田辺祭」になるわけです。

こうしたささやかな活動ばかりですが、２００３年頃から大学と地域の連携が少しずつ進んできました。そして、２００５年にその盛り上がりが頂点に達し、正式に京田辺市と学校法人同志社が包括協定を結ぼうという話になりました。これは感慨無量でした。

ちなみに、私と一緒に汗をかいたメンバーは今何をしているのか。大学関係では私も含め教員や職員、研究員になったものがいます。行政は市役所、独立行政法人などに就職しています。企業は大企業からベンチャー企業まで幅広くいますが、東京で起業して活躍している後輩もいます。ともかく、まちづくりＮＰＯに一度参加したメンバーたちは「こんなことをやりたい」がはっきりしているのです。なお、きゅうたなべ倶楽部は今でも続いており、現役生たちががんばってくれています。４年前、10周年のパーティもしました。

新島襄は「人ひとりは大切なり」と言われた。この言葉を私はこのＮＰＯで体験しました。皆さんもサークルやアルバイトや毎日の授業で何か人と違う足跡を一歩勇気をもって踏み出してみてください。そうすると、きっと何かが見えてくると思います。

同志社京田辺祭の誕生秘話

私はもう10年以上かかわっていないのでわかりませんが、名前を含めて当時の「思い」が、今、大学の皆さんに継承されているのかなということをお話ししてみたいと思います。

まず当時の同志社京田辺祭の数字をご紹介します。２００５年の１回目は大雨に降られ集客がほとんどできず、また学生による実行委員会ができていませんでしたので、２００６年が実質初めてのお祭でした。協賛企業は当時少なくて７社から協賛金をいただきました。協賛金は50万円。図書館裏にフリーマーケットのスペースをつくって14店舗出してもらいました。メインステージはラーネッド記念図書館前にステージを組み、24の団体が演奏や演舞をしました。その約半分は学生、約半分は地域の方にお願いしました。おじいちゃんおばあちゃんの大正琴や幼稚園のお遊戯、小学校のコーラス、高校の吹奏楽等もありました。模擬店は26のお店、しかもリサイクル容器を導入し、エコなお祭にしました。２日間の出店の総売上は１００万円でした。同志社京田辺検定というのも実施し、６００名の参加がありました。スタンプラリーは１０００人が参加。スポーツフェスティバルも同時開催してこれだけで４０００人動員しました。その他教室を使って人形劇や写真等の展示もありました。実行委員は47名。学生だけでなく地域の方にも入ってもらい、実行委員会をつくりました。学生44名と市民スタッフ３名。事務局は学生課から総務課に替わり、ローム記念館３０１号室を実行委員会事務局として借り拠点としました。結果、２日間で合計２万人の来場者。総予算が１５００万円。０からの出発でふたを開けるまで不安でいっぱいでしたが、２万人も来ていただいて実行委員長としてはただただ安堵でした。

なぜこのようなお祭の構想に至ったのでしょうか。一つは京田辺キャンパスに大学祭がなかったことです。理由は分かりませんが開学以来20年間、このキャンパスに学園祭をつくろうという動きがなかった。また、当時、京田辺市から包括協定を結ぶなら何か目玉になる事業が欲しいという呼びかけがあったのも追い風になりました。先ほども申しあげたとおり、１回目は失敗に終わり、幻となります。しかし、その失敗もあり、もっと地域に開かれたまちづくりをする必要があるのではという機運が高まり、「同志社京田辺祭」が実現したと思っています。なお、幻の２００５年度は11月４、５、６日の３日間でしたが、私が実行委員長になった２００６年は、１日削って２日間としました。この日に設定した背景には京田辺の市民文化祭という大きなお祭があったのです。そのお祭とも双方に乗り入れをしようとバスを出しました。市民の祭に来た人が大学に来て、大学のお祭に来た人が市民のお祭に行くというモデルです。これも市民と一緒のお祭をつくろうという現れです。また、甲子園20個分の79万平米の広さを全部使ってやろうということにも拘りました。正門からラグビー場までを全部使ってのコンテンツを考えようと。

ミッションも実行委員会でよく議論しました。結果、「京田辺及び京田辺の皆さんと同志社大学の教職員、学生が一緒になって一つのお祭をつくりあげる。ともに創出する」これをミッションにしました。そして、ミッションを作ったら毎回、会議で確認することにも拘りました。うるさいくらい確認しました。その後、ビジョンも作ります。「同志社大学は地域に開かれた大学になってほしい。また京田辺は地学連携のまちづくりを展開してほしい」。お祭は今も続いていますが、このミッション、ビジョンは残っていますか。

その他としては、地元の広報誌、新聞、回覧板にお祭の情報を掲載し、地元の自治会に挨拶まわりをして地元の家に招待状を出しました。皆さんももし招待状が来たら「行ってみようかな」と思いませんか。ですから、一番近くの普賢寺地域の皆さんには、「初めてのお祭をつくるので、皆さん、来ていただけませんか」と招待状をつくって実行委員長と副委員長で届けにい

きました。また、２００６年のお祭では、花火も１０００発あげましたし、同志社ベンチャートレインが企画したまちづくりコンテストも共催しました。京都は環境のまちですから、リユース食器を使ったゴミを出さないというコンセプトも大事にしました。他にも、同志社検定、「ニイジマン」という戦隊キャラ、プロのバンドライブ、あとは友近さんやとろサーモンさんなど吉本興業によるお笑いライブも実施しました。

名称についてもう少し言葉を足します。２００５年は音楽中心の多目的ホールで完結するイベントでした。それだったら「同志社京田辺祭」ではなくて「同志社祭」ではないかと問題意識をもったのです。ですので、「祭」が入った愛称をつくりました。「ＡＤＡＭ祭」です。今出川は同志社イブですが「祭」がついていない。こっちは市民とのお祭だということで愛称にも「祭」の名前を入れたわけです。「ＡＤＡＭ祭」。安直にイブとアダムと聞こえるかもしれませんが、実はもう少し考えています。ロゴをご覧ください。「遊ぼう（Ａ）、でっかく（Ｄ）、遊ぼう（Ａ）、みんなで（Ｍ）」。これがＡＤＡＭに込めた思いなのです。甲子園20個分の広大な土地で、みんなで遊ぼうじゃないかというメッセージです。また、この「遊び」にも思いを込めています。当時たまたま私の妻が卒業論文の研究で「遊び」の文献を読んでいまして、私も一緒にその手の文献を読んでいました。そうすると、「遊び」にも四つあることが分かったのです。「競争のスポーツ」の遊び、「賭け」の遊び、「見に行く、芝居や演劇」の遊び、「意外性をもった」遊び。この四つです。なるほどと思いました。「賭け」は大学に親和性がないので、それ以外の三つにＡＤＡＭ祭では注目しました。つまり、京田辺校地でやるのなら、このような「遊び」を前面に押し出したコンセプトで祭をつくれないかということです。さらに調べていくとまちの機能は住む、働く、交通だけでなく、レクリエーションのあるまちが豊かなまちだと定義するアテネ憲章というのがあることを知りました。つまり、コミュニケーション、コミュニティが大事で、遊びがないまちは人間としてゆとりのないまちだということです。だったら学園祭でその「遊び」をつくろうと。確かに昔はいっぱい遊びがありました。人と人が出会う場も、銭湯やお寺、神社の境内など沢山ありました。遊びの世界から固定化された社会に自由な発想が生まれ、ゆとりや人間性が育つのではないか。しかし、その遊びが不足している。だったらこのお祭でそれをつくろう。これが当時の実行委員会でミッションとビジョンを共有する時に私が喋っていたことです。遊ぶ機会が多いまち、目に見えないかもしれませんが、３６５日間、遊びの多いまち、遊ぶ場所が多いまち、どうしたら京田辺でそういうまちができるかというのが今でも変わらない私の考えです。「遊びのあるまち・京田辺」から「遊びのまち・京田辺」へ。以上が、ＡＤＡＭに込めた思い、誕生秘話になります。

おわりに

今日は皆さんと一期一会をいただいて、新島襄と京田辺にはどういう出会いがあったのかというお話と京田辺を調査して、市民の皆さんから叱られ「学生、がんばれ」という応援だと思って受け止めて団体をつくったお話、そして、インパクトのあるものが必要だという機運が重なって「同志社京田辺祭」という構想を実行させていただくチャンスを得たお話をいたしました。その時々に大事にしてきたのは新島襄の思いです。地方教育論、地方教育観、新島襄が地域で教育をするのだという思いは今出川だけではなく、京田辺にも同じように必要ということでした。もう一つはまちづくりの観点から遊びのあるまちを、この京田辺でつくるということ。「遊びのまち・京田辺」は一人ではなく、皆さんと一緒になってつくっていくことが必要というお話でした。

universityという言葉があります。私は当時からこんな造語をつくっていました。ＳをCityのＣに変えたunivercity。Clover祭のＣでもあります。これが私が同志社京田辺祭に込めた思いです。クローバー祭からユニバーシティに、大学のあるまちから大学のまちへ、同志社大学の後輩の皆さんにぜひ、つくり続けてほしいと思います。そして、ぜひ、後輩にも伝えていってほしいと思います。この同志社京田辺祭というバトンを、より発展させていただければＯＢとしてうれしいです。以上で私の講演とさせていただきます。ありがとうございました。

２０１７年10月31日　同志社スピリット・ウィーク秋学期

京田辺校地「講演」記録